

令和5年度第2回神戸市発達障害児（者）支援地域協議会代表者会 議事要旨

日時：令和6年2月1日（木）18時～19時50分

場所：中央区文化センター11階 1103・1104 会議室

1. 議題

- (1) 提言に関わる事業の取り組みについて
- (2) 主な事業の状況について（報告）
 - ①神戸市療育ネットワーク会議での検討内容について
 - ②神戸市地域障害児支援体制強化事業（モデル事業）について
 - ③計画相談及び補助事業の状況について
 - ④神戸市における様々な学びの場
 - ⑤障害理解の促進にかかる取り組みについて
- (3) 次期障害福祉計画への提出意見と提言について

2. 主な意見

- (1) 欠席委員からの意見
 - ・ひきこもり支援室との連携について、複合的に色々な領域から関わり、支援の切り口の視点を広げていることは良いことである。
 - ・療育センターにつながっても、より専門性があり継続的に診てもらえるところに早めに繋ぐ等の理由で、クリニックを紹介されることがある。待機期間が短くなったとしても、すぐに他機関を紹介しなければならないのであれば、継続性の課題が残るのではないか。
 - ・県立芦屋特別支援学校中等部では、神戸市の障害福祉に関わる情報が届いていない、という意見があった。市外の特別支援学校に通う子どももいるので、情報提供の在り方も検討が必要ではないか。
 - ・発達障害に関する普及啓発は進んできているが、未だに発達障害の診断を受け入れることが難しい親も多い。親が発達障害を認めず、本人も自己理解がないまま成長したため、大学に入ったものの就職に結びつかない現状があり、支援に苦慮している。
 - ・当事者主体のピアグループやセルフヘルプグループは重要である。
 - ・災害時の支援として、被災地での高齢者施設や障害者施設の連携や能力を高めていく必要がある。また、災害に備えて、発達障害の方への社会的な理解が必要である。
 - ・福岡県では、ひきこもりの子どもを積極的に受け入れている高校があり、高校の中に就労支援 A 型事業所を作り、カフェなどの就労体験をさせている。高校在学中に就労体験をするのは非常に良い取り組みであり、このような取り組みを広げていけばどうか。
 - ・計画相談について、事業者にとっては今の仕組みや報酬では、相談支援事業を立ち上げるのも非常に困難である。何か支援が必要ではないか。
 - ・パートナーとのコミュニケーション講座について、当事者が語るのも良いが、偏りが出てしまうので、大学の先生などからスーパーバイズがあった方が良いと思う。
 - ・児童発達支援事業所への巡回支援について、自法人内施設にも作業療法士が来られたが、

スタッフからは、具体的な支援についての助言があり、来ていただいて大変良かったと聞いている。継続的な巡回支援が大事ではないか。

- ・療育センターに通うほどではないと言われ、口コミで探した児童発達支援事業所にセルフプランで来ている子どもには、第3者的な意見がもらえ、コーディネートをしてくれるような場所が必要である。区役所での乳幼児健診などで、療育や相談支援機関の紹介が必要ではないか。
- ・神戸市では強度行動障害への支援について、どのように対応していくのか。
- ・就労の定着支援について、職場支援員、ジョブコーチ、ハローワークだけではなく、外部の人が職場の定着支援をすることが必要ではないか。また、一度辞めても再チャレンジができるような仕組みをつくるべきではないか。
- ・兵庫障害者職業センターでは、リワーク支援、ジョブコーチ支援を実施しており、周知を図っている。関係機関と連携を図り、ネットワーク会議やワークショップ等の開催時に、参加者に応じた職業センターの各種支援サービスの説明を行うことで、支援サービスの利用拡大を図ってきたい。

(2) 代表者会での意見

- ・こべっこ専門チームはまだ始まったところであるが、スムーズに効率よく療育センターにつながっているのか教えてほしい。また、療育センターからかかりつけ医へのつながりにも問題があるとのことだが、医療機関に福祉の情報を教えてもらえれば、医療機関でも対応できることがあるかもしれないので、その辺りについても教えてほしい。
- ・地域の児童発達支援事業所や放課後等デイサービス事業所に関しては、神戸市のホームページにも掲載されており、情報はかなり知ることができる。また、かかりつけ医が、軽い障害があり、支援学級等に行きながら地域の中で暮らしている子どもたちを支えることが、一番地域支援になるのではないかと考えているので、引き続きよろしくお願ひしたい。
- ・居場所事業を実施しているが、グレーゾーンの方は相談する場所が少ないという。困っている方は多岐にわたっているので、何でも相談できるような場所を親の会としても考えて行けたらと思う。
- ・発達障害はほかの病気と違い、血液検査や尿検査、CT撮影などで発達障害だと分かるわけではない。保護者の中には、ほかの病気と同じように考えて、どうしたら治るかと病院に行く方もいるが、薬を飲んだらこうなりますというのではなく、操作的診断しかできないため、そのことが保護者を不安にさせ、病院を転々と回ることになる。また、病院によって言われることが少しずつ違うことから、不信感や不安感が強くなる。
- ・発達相談を受けていると、医療面に関して正しい情報がしっかりと伝わっていないと感じており、保護者の様々な疑問や不安な気持ちにもう少し寄り添った体制が必要だと思う。
- ・神戸市は、5年、10年のスパンで考えると大変良くなっており、いろいろなサポートができるようになってきているが、そこから漏れる方への支援も必要だと思う。
- ・児童発達支援事業所や放課後等デイサービス事業所の質の向上について、訪問支援はすばらしいが、もう少し深める形でできるかどうか、検討していただきたい。

- ・医療的ケアの必要な子どもが支援学校にたくさん通っているが、これからは地域の学校でしっかり支援をしていかなければならないという方向になっていくと思う。今、医療的ケアの必要な子どもに対して、看護師がどの程度配置できているのか教えていただきたい。
- ・看護師の確保は、どこの自治体も苦勞しており、兵庫県の医療的ケアの協議会では、事業所が都心部に偏っているという話もあったが、神戸市はそういう意味では比較的人材が確保しやすいのではないかと。保育園等でも27人、医療的ケアが必要な子どもたちを受け入れており、かなり充実した体制になっていると思っている。
- ・例えば西宮市の場合、小さいから小回りが利くということもあると思うが、看護師を6名雇える支援学校が3〜4名しか雇えず、募集してもあと2名が埋まらなないと聞く。何故西宮市に医療的ケアの子どもが多いか調べてみると、西宮市は近くに兵庫医科大学病院があることや、兵庫県立尼崎総合医療センターに通う人も西宮市が住みやすいという事情らしい。神戸市にも色々な地域特性があると思うが、医療的ケアが必要な子どもは、どうしても専門の方がそばについていないと不安もあり、法的にも必要であると言われている。センター的なところだけではこれから難しい部分もあると思っているので、今後、補充などもよろしくお願ひしたい。
- ・大学生やひきこもりへの支援に関わっているが、発達障害者への支援は以前より充実しているものの、まだ色々な課題があると思っている。15年前よりはるかに色々なサービスが増え、各部署の様々な努力も感じるが、発達障害者がもう困っていないかという決してそうではなく、当事者や家族は15年前と変わらず困っている。
- ・対象者に対して何かをするという医学モデルという見方も大事なことだと思うが、一方で、社会モデルという考え方、障害を特性として生かせるような社会、包括できる社会であれば、そもそも困らないのではないかとという視点がとても大事だと感じている。
- ・今年、フィンランドやオーストリアを視察したが、そこでは社会モデルの視点が進んでおり、軽度の発達障害者は障害と言われず社会に馴染んでいた。神戸市においても、差別解消法の改正を良いきっかけにして、社会的モデルという視点を、教育現場や企業を巻き込んで進めていただきたい。
- ・医学モデルという視点も大事であるし、ここならチャットのように、LINEを使用し相談にチャットを活用することも、とても良い取組だと思う。
- ・教育に関する相談は、コロナ以降より増えている実感がある。神戸市として、不登校やひきこもりに対する今後の取組や対策があれば聞かせていただきたい。
- ・特別支援学校から就労するため、しごとサポートに登録された方について、企業と連例して支援をしているが、連携していない企業からも、発達障害者に対する対応についての問合せが増えている。そういったことからジョブコーチの制度は大事だと思っているが、ジョブコーチによる支援を断られる企業もあり、今後、ジョブコーチの定着に向けて工夫が必要だと思っている。
- ・ハローワークとしても、就労の定着支援は、今後重要だと思っており、関係機関とのチーム支援という形でしっかりとやっていきたい。令和6年度以降、障害者の法定雇用率が引上げとなるが、雇うことに加えて定着していただくことが大事であり、これから重点的に

取り組んでいきたいと思っている。

- ・居場所事業の閉鎖については、大きな不安や不満を向けられることもある。我々が考えるより、人と関わることに對して、臆病ながら強く興味を持たれており、本当の自分のままで過ごせる場所が非常に大事だと思う。事業所の閉鎖は非常に残念だが、今後もつながりを継続できるよう、何らかの場所を持っていただければと考えている。
- ・こべっこ発達専門チームの説明で、4分の1が療育センターにかかり、4分の3は地域で支援という話があったが、学習支援も含めて本当にできるのか。学校モデルや社会モデルがきちんとできてくれば、4分の3の子どもたちにも支援が行き届くと思うので。その辺りも合わせて進めてほしい。
- ・強度行動障害について、行動上の問題を抱えている方への対応は難しく、二十歳ぐらいになると親も面倒をみることができず、受け皿がないということもあると思う。一旦病院で受けても地域へ返せないことについて、意見を伺いたい。また、行動上の問題を抑制するような施設しかないということもあるが、そこまで至らないようにしていくことが大切だと思う。
- ・能登半島の被災地支援では、災害時共通の問題もあれば違った問題もあり、型に当てはめて考えるのは難しいと感じた。福祉避難所の建物が被災して入れない方や、環境の変化に對応できず避難所に移れない方など、障害によってそれぞれ違いがあるので、きめ細かい視点と大きな視点を合わせながら、この能登半島の地震を機会に、神戸市の障害者支援について、改めて考える必要があると思った。

(3) 閉会後に事務局に寄せられた追加意見

- ・相談支援事業所について、相談者とゆっくり長く信頼関係を築いていくためには、相談支援専門員が基本的なことを知ること、困ったときに聞ける仲間がいること、相談支援事業所間での情報共有や事例検討、定期的にスーパーバイズしてもらえる仕組み作りが必要である。
- ・障害児(者)のサービス等利用計画のセルフプラン率を下げる取組として、人材確保支援費補助事業や定着支援補助事業、障害児相談支援促進補助事業は良い方法だと思う。また、相談支援専門員の育成、計画相談の困りごと等をまとめて相談できるような、信頼できる事業所に委託するのも一つの方法ではないかと思う。
- ・グレーゾーンの方への支援について、診断を受けていなくても利用できる相談先や居場所などの支援情報をまとめるなど、わかりやすい表示があれば、行きやすいと思う。
- ・居場所事業について、子育て支援の関係者とも、発達の延長線上にあるグレーゾーンや発達特性などについての相談ができる場所があることを知ってもらうための、連携が必要と感じる。